

山添村 謎の神社配列

理事 柳原輝明

1. はじめに

山添村の神野山には不思議なイワクラが多数存在している。その中でも特に不思議なイワクラ群が神野山にある。そこには、天空の星を地上に写し、山そのものを天球とみなし、天空の星空を再現している。このことについては、イワクラ（磐座）学会第1号学術書「イワクラ」―巨石の声を聞け―に詳しく述べてある。興味のある方は参照して欲しい。

この神野山のイワクラについては、誰もが知っている有名な恋物語、牽牛と織姫と天の川を再現していることから多くの人のロマンを掻き立て、マスコミにも取り上げられて一躍有名になった。おかげで、神野山を訪れる客も増え、特に旧暦の七夕の頃に地元の有志が主宰する七夕祭りは、巨石が川のように累々と繋がる鍋倉溪に数百本のソーラーライトを灯し、天の川を再現している。最近では若いカップルが多く訪れるようである。ところで、実は、天空の星を写し

のと思い、あえて発表する事にした。

2. 山添村の超古代文明

山添村は、1万5千年以前より人類が住み高度な文明が開けていた。

このことは、縄文時代草創期の集落遺跡やそこから発見される数々の土器で裏付けられている。特に、名張川河岸で発見された「大川遺跡」はかなりの人口を擁していたことや、そこから発見された土器は「大川式土器」と呼ばれ、土器の年代識別に利用されているほど有名である。その他、貯水ダム建設に先立ち調査された結果、山添村の谷筋には非常に多くの集落跡が発見された。これらの遺跡やそこから発見された遺物は山添村大西の民族博物館に展示されている。興味のある方は是非見て欲しい。

た神野山のイワクラの発見以前に神野山を中心とした不思議な祭祀遺跡（神社やイワクラ）の配列の存在がわかっていた。それらは、神野山を中心とした円環状の配列であったり、東西一列に等距離で配列された神社などである。当初、これらの神社は神野山に沈む太陽を拝むための祭祀場であると考えていたが、神野山の南側にも祭祀場があることから、太陽祭祀と言うより、神野山そのものを拝む場所である可能性のほうが強いと考えた。もちろん、明らかに冬至の太陽が神野山に沈む姿を拝む位置に存在する神社もあることから、太陽祭祀の祀り場としての神社の存在も否定できない。

現在のところ、これらの不思議な配列を示す神社群の謎が解明されているわけではないが、なにかを現代に伝えているように思えてならない。

以下に、山添村の神社群の不思議な配列とその意味について考察したが、充分解明できたとは考えられず、諸兄の御意見を是非お伺いしたいも

このように、多くの縄文時代の住居が発見されたという事は、とりもなおさずこの山添村に超古代に多くの人口が居住していたことを裏付け

ている。これに伴い、縄文人が敬い生活の一部となっていたであろう「磐座」が随所に点在するのである。その多くは破壊され、或いは森の中に埋没したのも多くあるが、運良く今の時代にまで生き残ったものは神社のご神体として今に伝えられている。著名なものでは大字吉田にある「岩尾神社」や大字下西波多にある「吉備津神社」、大字峰寺の六所神社などがある。その他神社のご神体にはなっていないが、地元の人たちに古代から大事にされ、足を踏み入れることを禁じられていた巨石が多く存在している。これらは、全てとは言わないが、その多くが縄文時代の人々の祭祀の為の遺跡であったり、または、神野山というご神体山を拝む為の場所であったりしたことは間違いないであろう。

これらの山添村に存在する神社（巨石を「神体とするものやそうでないものも含めて）を全てプロットしてみたところ、そこに不思議な法則が見えてきた。

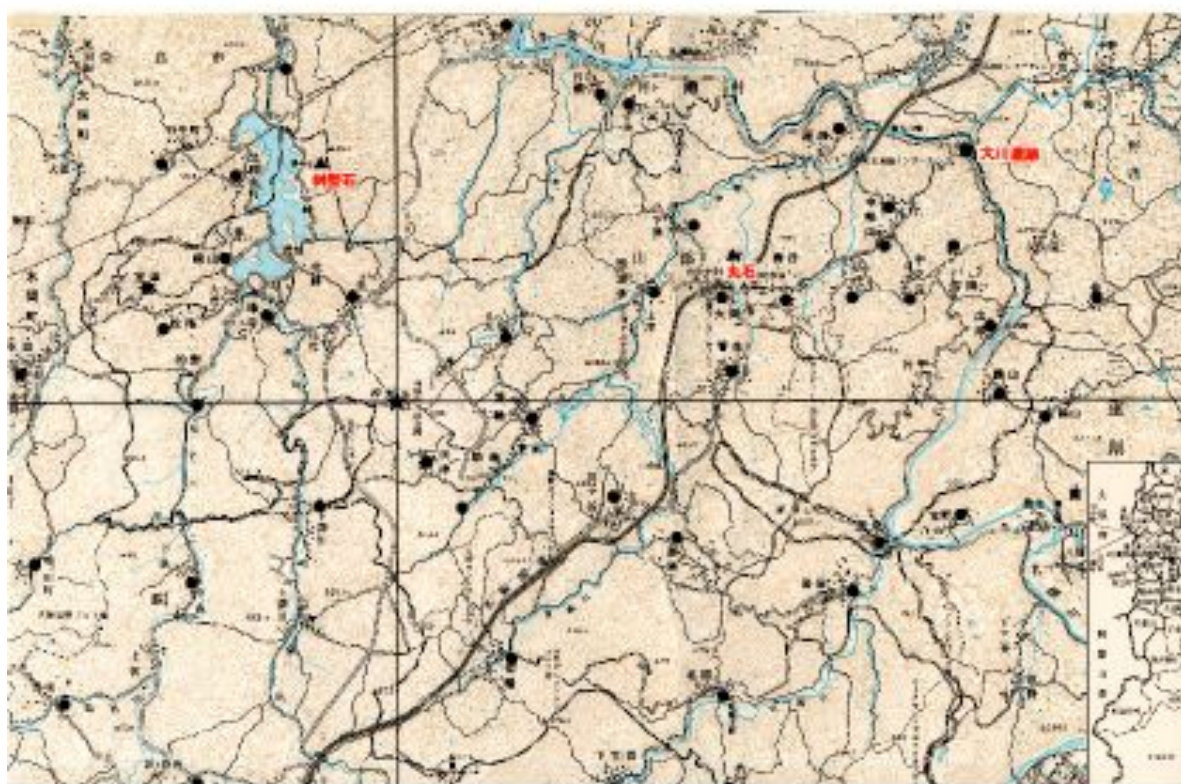


図-1 山添村の神社群

● 神社

(1) 神野山を取り巻く祭祀場

(イ) 神野山を取り囲む二重の円環

神野山の山頂を中心として同心円状に神社が配置されている。外側の円環上には五ヶ所の神社が配列されており、内側の円環上には四ヶ所の神社が配列されている。同一円環に3ヶ所程度の配列であればそれはたまたまと言う事の可能性も高いが、4ヶ所以上の神社が配列されているとなると、それは偶然と言うより人為的に配列されているとみなす方が妥当であると思う。さらにいえば、現在神社として残っている古代祭祀場は、運良く現代まで続いたもので、さらに多くの祭祀場が森の中に埋もれ、忘れ去られているものと思われる。例えば、地元の人に聞いたところでは、西波多の春日神社北西の山の中に「狐岩」と呼ばれた巨石があったそうである。この岩は、残念な事に茶畑開墾のときに砕かれてなく

なってしまったようである。この岩が残っていればこの外側の円環上にあった可能性が高く、このように円環上に未知の埋もれた古代祭祀場が存在している可能性は高い。

(ロ) 円の大きさの持つ意味

二つの同心円は、外側の円の半径が丁度3,500mで内側の円の半径が1,600mである。外側の円の半径は1万縄文尺(1縄文尺35cm)と非常にラウンドな数字になっている。これは単なる偶然なのだろうか、それとも縄文人のなせる技なのか。その場合も、内側の円の半径が4,570縄文尺とラウンドな数字で無いのが気になるのである。

(ハ) 結界としての円環

当初、この同心円状に配列された神社は太陽の運行を示すものと考え

たが、神野山の南側にもあることから、これは太陽を遥拝する場所ではないと言えそうである。むしろ、神野山そのものを遥拝する祀り場であろうと思われる。ただその場合も、なぜ神野山山頂から等距離である必要があったのかよくわからない。ただ、山頂を遥拝するだけなら必ずしも等距離である必要はないであろう。

今ひとつの考え方は、神野山と言う神聖な御神体の結界を示しているのではないか。遥拝場の数そのものは少ないが、その距離を等距離にすることににより見えない円環の結界を表現したのではないだろうか。

なお、今のところ二重の円環が見受けられるが、これは、会報9号で江頭氏も述べられていた、古代祀り場の変遷、上津磐座・中津磐座・辺津磐座を示しているのではないかと

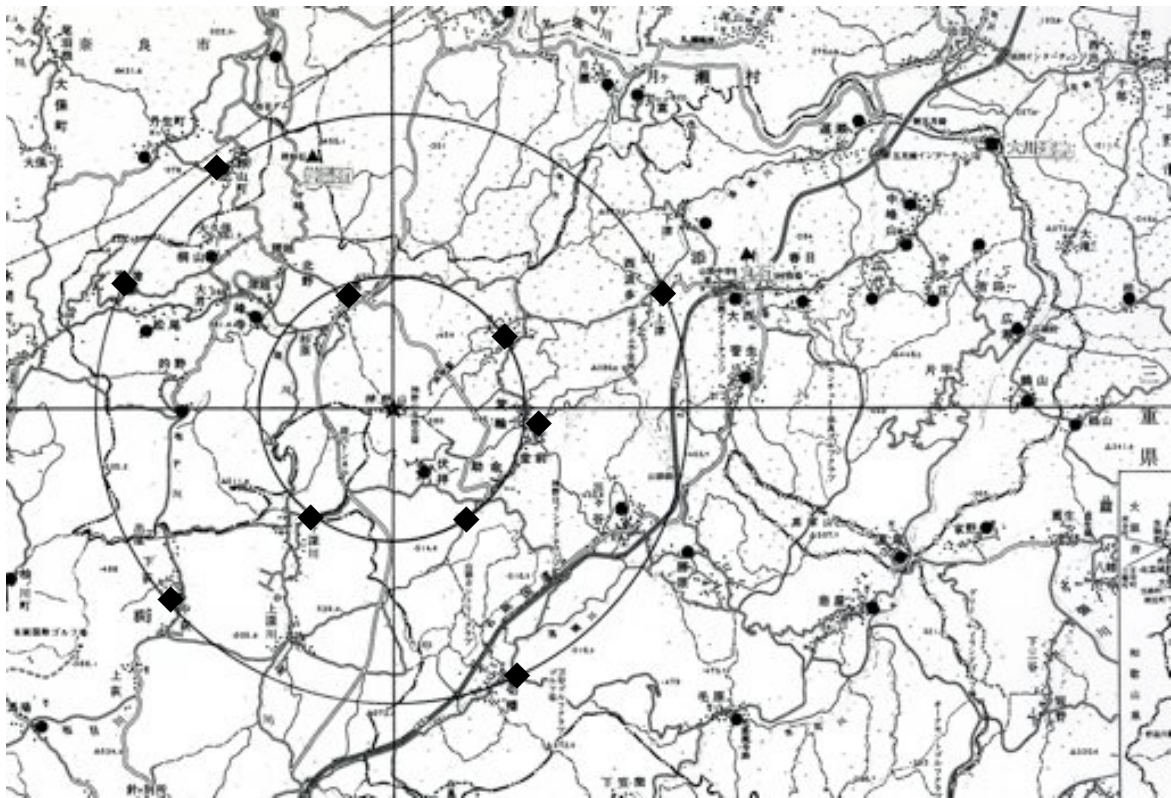


図-2 円環状の配列

◆ 円環上の神社

謎 (2) 直線状に配置された神社群の

神野山の北側約1.3kmのところを東西に一直線上に神社が並んでいる状況が見られる。しかもその神社間の距離は約800mと等距離に配列されている。この神社の配列の意味は今のところわからないが、太陽か又は星の何らかの動きを表している可能性がある。

これら遺跡は、太陽の動きに対して何らかの祈りを捧げる儀式をしていたことは間違いないと思われ、それは、例えば太陽の動きを知り1年の節目を示す暦のような役割があり、節目ごとに祈りを捧げていたのかも知れない。また、太陽によって食料が与えられるめぐみに対しての感謝の祈りを捧げたのかもしれない。あるいは、太陽が沈み、また登ることが人間の死と再生を意味しており、再生を祈る儀式を行ったのかもしれない。

ない。

ここで、規則的な配列から神野山に太陽が沈む遙拝場ではないかという仮説の基にそれぞれの神社と神野山の山頂との角度(方位角)を算定し、一方神野山頂上と各神社との仰角(距離と高度差から算定)から神野山山頂に太陽が沈む時期をステラナビゲーターで調べてみた。

その結果西波多の春日神社は2月4日の「立春」に当たっている。そして最も東の端の上野市桂の*神社は方位角8度、仰角2度で、神野山山頂に太陽が沈む日が3月6日の「啓蟄」の日である。これから推定して、東西に直線状に並ぶ神社群は神野山山頂に太陽が沈む状態を観測し「節季」のうちの立春から啓蟄までの太陽の動きを観測、遙拝したのではないかと推定できる。しかし、直列している神社の数は6ヶ所、それに対して立春と啓蟄の間に「雨水」という節季があるだけで、その数3である。残りの3ヶ所の神社は何を

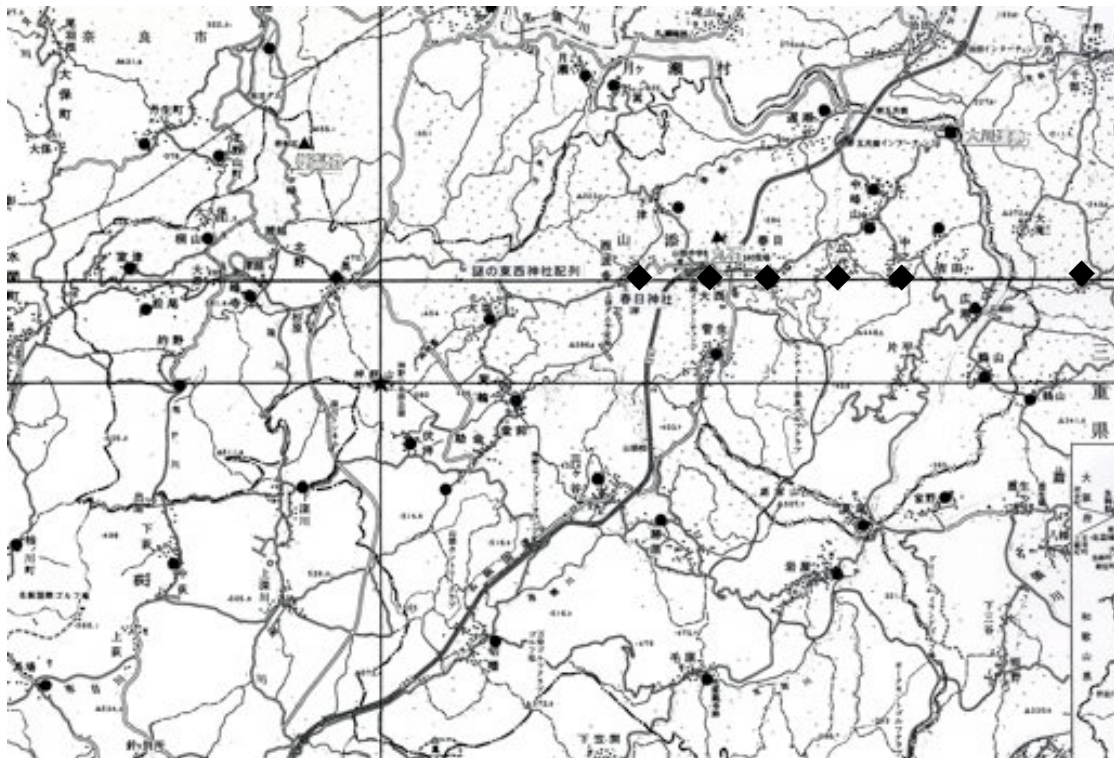


図-3 謎の東西神社配列

◆ 直線上の神社

示しているのかよくわからない。ひよっとすると、太陽が弱まっていく様、即ち、秋分から冬至までの太陽の神野山山頂に沈む様を観測、遙拝した場所かもしれない。これはまったくの主観的想定であり、根拠はない。

なお、中国の24節季との関連があるかも知れないと考えたが、中国のそれが日本に伝わったのは弥生時代の頃、農耕の伝播と関連していると思われる。

ところで、山添村には縄文時代の遺跡は多数発掘されているが弥生時代のそれは少ないようである。これは、農耕が発展するに従い、平地の少ない山添村では住民が生活できず、人口が減少したのではないかと思う。当然農耕生産のないところで農耕の目安となる24節季が導入されるとは考えにくく、山添村の直線状の神社群は、中国から伝来した24節季とは関連していない可能性が高いように思う。

現在のところ、図上及びステラナビゲーターによる非常にラフな検討であり、現地それぞれの節季の時期に太陽が沈む状況を観測したわけではない。そのため、それぞれの神社が本当に節季の時期をあらわす遥拝場かどうかは定かでない。ただ、確かなのは、東西に直線状に神社が直列している事だけである。今後、現地で、息の長い観測をしないと確たることは言えないが、あえて、現時点でこのことを発表したのは、個人では判断がつかなかったことによる。

諸兄の意見をいただければ幸甚である。

線 (3)夏至の太陽・冬至の太陽の祭祀

古代の人は、太陽を祀り、その恵みを感じてきた。その中でも、夏至の太陽に対する感謝の祈りや冬至

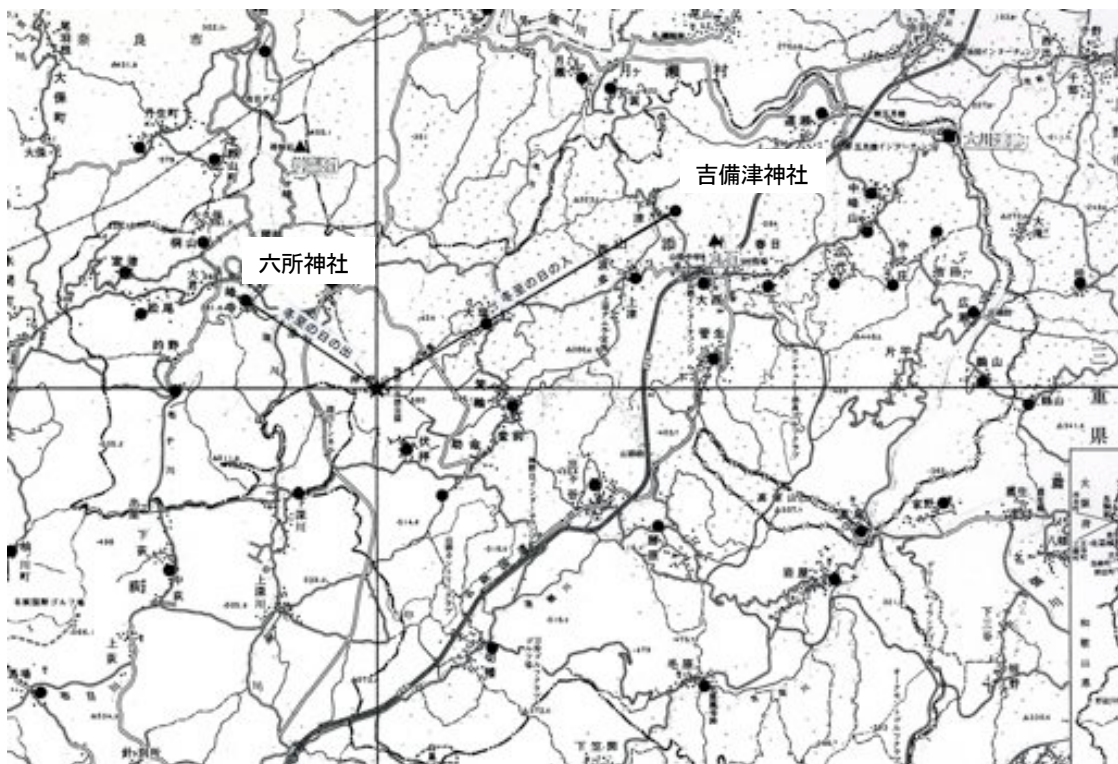


図-4 冬至の太陽祭祀

の太陽復活の祈りは、とくに重要であつたと思われる。

上記の(1)、(2)で記したように古代の祀り場であつた神社の不思議な配列から、古代人の祀りの一端が覗き見られるが、当然これら神社の中に太陽の恵みに感謝する祀り場があつてしかるべきであり、それを探してみた。

まず、冬至の時期神野山山頂に太陽が沈む様子を遙拝する場所を探してみた。山添村の冬至の太陽の沈む方位角は28度である。神野山より低い場所から神野山山頂に太陽が沈む状態を遙拝する場合、その高度差を考慮しなくてはならない。古代の人は、太陽の光が最も弱くなつた状態で神野山山頂に沈む場所を実際の場所に立つて選定したものとと思われる。

今、図上で、仰角を考慮して神野山山頂に太陽が沈む姿を見られる神社を探すと西波多の吉備津神社がそれに当たるようである。吉備津神社は巨大な岩を御神体にし、拝殿のみ

がある古い形式の神社である。おそらくこの巨岩の上で神野山山頂に沈む太陽を遙拝し、太陽の復活を祈つたのであろう。

同様、冬至の太陽が神野山山頂から昇るのを遙拝する神社を探すと峰寺の六所神社がそれに当たる。方位35度で仰角8度である。まさしくこの神社から冬至の太陽が弱々しく昇ってくるのが遙拝でき、何らかの復活の祈りをささげたのかもしれない。この六所神社は巨石を土台にして神殿が建築されている。巨石を御神体としていること先の吉備津神社と共通点があり、冬至の太陽を遙拝する上で何らかの意味を持っていたのかもしれない。

一方、もう一つの太陽祭祀の方角、夏至の太陽を遙拝する神社はと探してみた。その結果は、奈良市都祁川にある「春日神社」がそれに近いが、厳密に見ると、その高度差を考慮しても2度ほどずれていることがわかつた。この神社以外夏至の太陽

の日の出を遙拝できる神社またはイワクラは見つけることが出来なかつた。

なぜかは不明であるが、古代この地の人達は冬至の太陽の復活を祈つたが夏至の太陽の復活を感謝する習慣がなかつたのかもしれない。よくわからないといつたのが本音である。

4. まとめ

以上、山添村の古代祭祀場跡である神社群の不思議な配列を見てきた。どれもがまだ充分調査や検討されていない段階であるが、あえて発表した。解釈や理解に思い込みもあるかもしれないが、しかし、厳然として存在する不思議な神社の配列、そこに何らかの古代のメッセージや古代の人々の精神文化や生活の一端を示しているのではないかとの思いが強い。しかし、私の浅い知識では充分解明できないのが残念で悔しく思つ

ている。この不思議な神社群の配列について何らかの意味を読み取れる方、是非御教授いただきたい。

特に、(2)の直線状の神社群については、中国の24節季との関連はわからないが、古代において秋、春分の日や冬至の日に何らかの祭りをしていたことは各地の祭祀遺跡から明らかである。ただ秋分と春分の間祭祀については、あまり明らかになつていないが、少なくとも山添村の直線状に並んだ祭祀線から冬至と春分の間、若しくは秋分と冬至の間に5つの何らかの祈りが捧げられていたことが読み取れる。立春や立冬という概念は古代の祭りとは関係していないかもしれないが、太陽の復活や再生を願う祈りの節目として何らかの意味があつたことが想像される。